

礼拝：2021年9月19日（日） 聖霊降臨節第18主日

交読：詩編119編33～40節

聖書：出エジプト記20章1～17節

マタイによる福音書19章16～30節

説教：「永遠の命をつぐ道」 佃 雅之

キリストのもとには、色々な人が、色々な問題や悩みを抱えてやって来ます。今朝の箇所では、ある男が、一つの問い掛けをもって、キリストのもとにやって来ました。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか」ある男からキリストへの真剣な問いかけです。私たちも、これまでに「永遠の命」について、またその獲得のために「どんな善いことをすればいいのか」思いを巡らせたことがあるでしょう。パンデミックに遭遇した私たちは、これまでより「命」ということへの意識が高まったと言えるかもしれません。いずれにしても、私たちもキリストのもとを訪ねた者の一人であることに違いはありません。私たちは、あの日、あの時、どのような思いから、キリストに近寄ったのでしょうか。今日の礼拝では、私たちが最初にキリストの前に進み出た日のことを思い起こしつつ、聖書に示された「永遠の命」について、共に考え直してみたいと思います。

この箇所の青年とは、20代の若者だと言われています。私たちもそうですが、大人になるためには、自分のこれまでの生き方を見つめ直す必要があるものです。ある牧師は、人間が成熟した大人になるためには「自分にうそをついてはいけない」と語っています。うそや誤魔化しは、行く道、進むべき道を誤らせてしまうからです。しかし、自分の気持ちは自分一人では、確かめられないところがあります。そのために、人生の先輩、人生の師の一言がとても大切です。そういう意味において、キリストほど人生の師にふさわしいお方は他にありません。成熟した大人になるための道を歩み出すためには、また、与えられた命を終わりの日まで生き抜くためには、キリストの言葉が必要です。青年が成熟していくために、私たちが、生涯をかけて悔いのない人生を歩むためには、どのような生き方をすればよいのでしょうか。「善いこと」とは何でしょう。

キリストが答えます。「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである。もし命を得たいなら、掟を守りなさい」言い換えれば「我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」という教えです。イスラエルの民であるなら誰でも知っている、基本で当たり前のことを、キリストは青年に語りました。青年は、当たり前すぎて拍子抜けしたのか、それとも、何か特別な新しい解釈や意味があると考えたのか「どの掟ですか」と改めてキリストに尋ねます。キリストは、今日、福音書と共に読みました十戒の後半を引用して「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい」と答えます。改めてキリストが言われた戒めは、対人関係についての教えで、隣人への態度を規定しているもので

す。これこそが最も大切な掟で、言葉として言い表された天の父の御心です。天の父の御心を行うことこそ善いことであるからです。善いこととは、神の言葉の実践以外の何ものでもないことを、キリストは教えました。

キリストは善いことの具体的な答えとして、最初に「殺すな」と語っています。永遠の命とは、何より人を殺さないこと、それは、お互いが生かしあうことを意味しています。神によって、私たち一人ひとりが生かされていることを大切にすることです。永遠の命を得るためには、私たちの毎日の生活に、神を愛し、人を愛することが貫かれていることが必要だとキリストは言います。聖書の教えの一番の基本を実践する。このことこそ、永遠の命を得ることにつながるからです。

青年がキリストに答えます。「そういうことはみな守ってきました」この言葉は本人の意識としては、うそや誤魔化しではなかった。しかし、彼はキリストのもとにやって来たのですから、永遠の命を得られる確信が持ててはいなかったのでしょうか。神を愛し、人を愛する、このもっとも大切な掟を小さいころから守りながらも、神と自分との縦の繋がりも、人と自分との横の繋がりも、確かなものとして感じる事ができない。日常の中で、自分が生き生きと、生かされていると感ずることができなかったから、キリストのところにその青年はやってきたのでしょうか。そのことを見抜かれていたキリストは、青年に「もし完全になりたいのなら」と語りかけます。

聖書には「完全」という言葉が、たびたび出で参ります。使徒パウロが、ローマの信徒への手紙12章2節で、異邦人たちに完全について語っています。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい」これがローマの人たちにパウロが勧めたことです。完全になりたいのなら、まず、自分を変えていただかなければならないということです。心が新たにしなければ、私たちは本当の意味で、神を愛し、人を愛することはできないからです。完全になるということは、自分を変えていただく、自分が新しくなることから始まる事柄であるからです。青年は、このことに思いが至っていませんでした。

キリストが青年に語ります。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」変わるというのは、何と具体的なことでしょうか。私たちも、初めてキリストの前に進み出た時、具体的な変化が求められました。これまでの日常と決別して、主の日ごとに教会に参ずる。主の日ごとにキリストに近寄り、主の言葉を聞く。そして、いただいた主の言葉に応答していく。信仰とは、具体的な変化を伴います。しかし、キリストの教えは、あまりにも具体的すぎて青年は躓きます。「たくさんの財産を持っていたから」です。

けれども、注意深くキリストの言葉を聞けば、青年の持っている富についてキリストは一切批判することはしていません。必ずしも、富が人を天国から閉め出すものではないからです。ですから、施すことが評価されるものではありません。キリストが青年に求めたことは、御言葉への服従です。徹底的な自己放棄がなければ、人間は変わったと言えないからです。自分自身を溺愛しては、キリストに従うことは出来ません。悪いことはしない。律法はすべて守った。しかし、それが神との結びつきにならなかった。決定的に足りないものがあつた。彼は、所有物を自分のものと考え、神から賜ったものとして、他人を助けるために用いることができませんでした。これまでの生き方と決別することができませんでした。

富は、いつの時代もやっかいなものです。富がキリストに従うことを、命への道を、天の国に入ることを邪魔するので。お金が私たちを支配するということが事実あることです。お金が一番大切だとは思わなくても、やはりお金がなければと考えることは私たちにもあります。富の誘惑は大きい。しかし、神と富とに仕えることはできません。立ち去った青年の悲劇とは、守っていたはずの「掟」のもっとも大切なことが欠けていたということでしょう。そもそも「**どんな善いことをすれば、永遠の命を得ることができるのか**」という問いが、間違っていました。善いこととは、唯一の神に出会うことであり、神の愛に正しく答えることですから、「**どんな善いことをすれば**」という問いかけは、着眼の仕方、目の付け所が違ったのです。何か善いことをして、人間の業を積み上げて自らの力で永遠の命を得ようとするその考え方、感じ方が間違っていたのです。

23 節で、弟子たちに「**はっきり言うておく。金持ちが天の国に入るのは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい**」とキリストは語りました。このキリストの言葉は、金持ちのことだけを言っているわけではありません。これまでの自分の生活を捨て、生き方を変えキリストに従った弟子たちが「**それでは、だれが救われるだろうか**」と言っているからです。キリストが言われた「**らくだと針の穴**」の真意は、この青年も、弟子たちも、私たちも自分自身を省みて、本当の意味で自分が針の穴ほどの小さな者だと目覚めたとき、天の国の扉を通ることが出来るということかと思えます。人間は、唯一の神、ただ一人の善き方との出会いによってのみ、小さくなる事が出来るということでしょう。しかし、弟子たちは青年とは違って、網を捨て、舟を捨て、家族を捨て、何もかも捨ててキリストに従って、今、エルサレムに向かう旅を続けています。「**このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました。では、わたしたちは何をいただけるのでしょうか。**」と尋ねたペトロにキリストが答えます。「**はっきり言うておく。新しい世界になり、人の子が栄光の座に座るとき、あなたがたも、わたしに従って来たのだから、十二の座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる**」これこそ、百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐことができるという約束です。

ある神学者は、キリスト者に与えられる報いとは、孤独からの解放だと言っています。キリスト者は、神との間に、人との間に新たな交わりを持つことができる。キリスト者になるということは、他人の目には、何も変わって見えない世界が、キリストによって新しい世界に見えることです。自分の目に見えるものに心奪われることなく、たとえ死んでも無くならない神との関係という生きる根拠が与えられるということです。キリスト者は、主イエス・キリストにある神の愛から引き離されることはありません。しかし、このキリストの約束を確かなものとするためには、具体的に自分が変わらなければなりません。私たちの何かを捨てなければなりません。私たちと神との関係を邪魔するものは、幾らでもあるからです。時には、お金だけでなく「**家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑**」が、信仰生活の躓きとなることもあるでしょう。しかし、キリストの言われる「捨てる」ということは、自分の手から、神の御手に委ねるということです。私たちが自分の所有物だと思い込んで、自分の手に握り締めているものから手を離して、主なる神に委ねるのです。

永遠の命とは、永遠に続くという意味では無く、神にふさわしいものという意味です。何よりもまず、キリストを信じるといことです。キリストについて行く気持ちを失わないことです。キリストの前から立ち去ってはなりません。悲しくなっても、腹がたっても、情けなくなっても、キリストのもとに飛び込み続けることです。キリストにとどまり続けることです。

最後に「**先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる**」とキリストが語っています。誰が先で、誰が後かは分かりません。悲しんで立ち去った者であっても、またキリストのもとに戻ってくることもありえます。いずれにしても、すべてキリストが導いてくださいます。「**それは人間にできることではないが、神は何でもできる**」からです。この御言葉の恵みを受けて、キリストにすべてを委ねて生きることができるなら、私たちも永遠の命を受けつぐ道を歩み続けることができつとできます。祈りましょう。

聖なる神。パンデミックにあつて、教会に集うことのできない私たちですが、あなたの変らぬ恵みによって支えられ、今日も御前に導かれたことを感謝します。自らは小さくなることの出来ない私たちを憐れみ、心から御前に悔い改める心を与えてください。私たちがこれからも、あなたの弟子として、あなたの子として、あなたを愛し、隣人を愛し、キリストに従い行くことができるようにしてください。御言葉で私たちを変えて、永遠の命をつぐ道を歩ませてください。主の御名によって祈ります。アーメン。

讚美：讚美歌 5 2 2

献金 主の祈り

黙禱